

消化器外科・小児外科

● スタッフ (平成29年10月1日現在)

診療科長 勝又 健次
 医局長 林 豊
 病棟医長 太田 喜洋
 外来医長 許 文聴

医師数 常勤 28名
 非常勤 12名

● 診療科の特徴

当科では成人の消化器疾患と、小児外科を扱っている診療科です。消化器疾患を臓器ごとに上部(食道・胃)、下部(大腸・肛門)、肝・胆・膵の各グループに分け、また小児外科グループも含め、最先端の医療を提供できるように診療・研究を行っています。

食道癌については、内視鏡下粘膜下層切開剥離術(ESD)を早期癌に行い、ロボット支援手術を含めた胸腔鏡下食道切除術を取り入れております。胃癌の早期癌には適用によりセンチネルコンセプトを利用した腹腔鏡補助下切除術を行っています。進行癌には新規抗癌剤による治療を積極的に行っています。

結腸癌・直腸癌の約70%を腹腔鏡下に施行し良好な成績を得ています。また肛門の機能温存手術(自律神経温存手術・内括約筋のみ合併手術など)を行い、患者様のQOLに貢献しています。

肝切除・膵切除例は癌の制御を目指し手術だけでなく新規抗癌剤などによる術後補助療法を積極的に行うとともに、その副作用を患者血液の遺伝子解析を利用して予測する研究も行っており治療に役立たせております。特に膵癌に対しては、近年症例数が増加しており、内視鏡手術を積極的に取り入れております。

小児外科領域は食道裂孔ヘルニア・Hirschsprung病・鼠径ヘルニアに対して腹腔鏡下手術を導入し良好な成績を得ています。また小児泌尿器科的疾患も積極的に手術を行い良好な成績を収めております。

● 診療体制と実績

全体の手術総数は923例でした。例年750～950例で推移しております(図1)。

食道癌の切除例(手術・内視鏡的切除)は年間73例で、胸腔鏡を含む開胸による手術は44例で、早期癌に対して行われた内視鏡下粘膜下層切開剥離術は29例でした(図2a)。胃癌の切除例(手術・内視鏡的切除)は年間78例で、腹腔鏡下手術は19例でした(図2b)。腹腔鏡手術の割合は年々増加傾向にあります。

肝切除・膵切除例はそれぞれ年間39例と155例です。とくに膵臓疾患については近年増加傾向にあり、腹腔鏡下手術を積極的に取り入れております(図2c,d)。結腸癌・直腸癌の切除例は年間210例です。また、かねてから手術症例のうち70～80%の症例に対して腹腔鏡下手術を取り入れており、良好な成績を得ております(図2e)。

小児外科領域は年間157例の手術を行っております。2011年からは小児泌尿器科的疾患も積極的に手術を行っております(図2f)。

図1：総手術件数

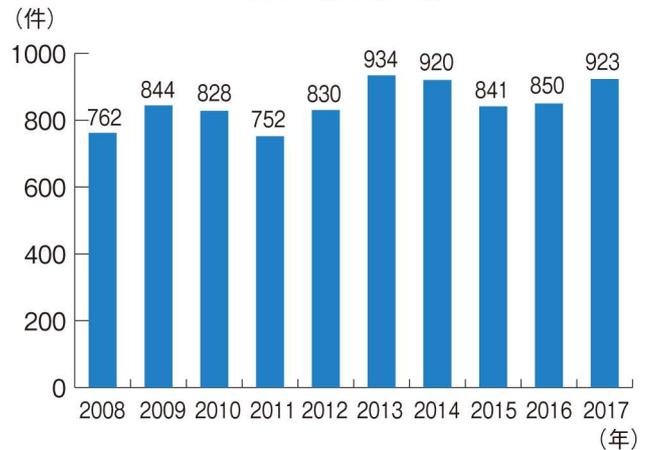


図2a：食道切除

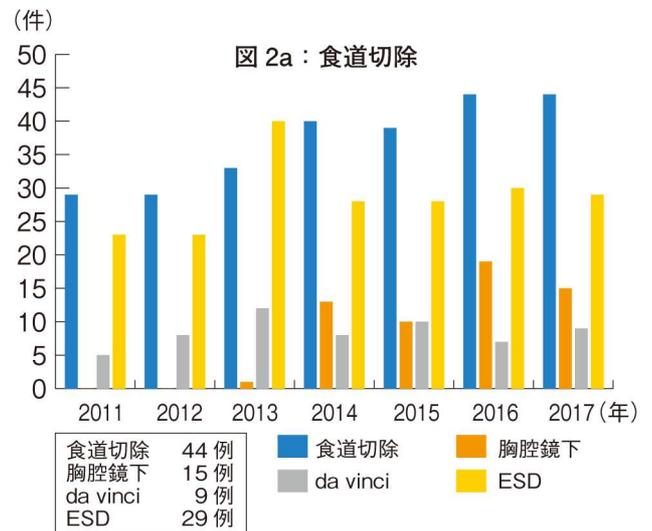


図2b：胃切除

